

絵図に見る水の都・松江

京都府立大学・文学部
上杉 和央

○地図史概観

・古代の地図

国土把握のための図：国郡図

天平 10 年（738）「国郡図」造進の命（『続日本紀』）

延暦 15 年（796）「諸国地図」作製…「諸国郡邑、馭道遠近、名山大川、形体広狭」を記録するよう指示（『日本後紀』）

土地把握のための図：荘園図

最古の年紀：天平 7 年（735）「弘福寺領讃岐国山田郡田図」…ただし後年の写し

※国土把握・土地把握（一部施設・都市把握）のための地図は古代より作成

・中世の地図

世界認識：仏教系世界図・旧大陸図

「日本」：行基図

土地把握：中世荘園図 ex.) 出雲大社并神郷図（出雲大社及近郷絵図）

都市：左右京図

施設・寺社：宮城図・曼荼羅図

・近世の地図

「すでに各種の要素・種類が出揃ってはいたが、近世にはそれが一層多様化し、多彩に展開した。しかも、手書き図に加え、木版刷りの刊行図が一般化し、さらに、より精度の高い測量図も出現した。」

金田章裕「絵図・地図と歴史学」（『岩波講座日本通史』別巻 3、岩波書店、1995）

a. 江戸幕府による国絵図作製事業

慶長：慶長 9 年（1604）～ 正保：正保元年（1644）～

元禄：元禄 10 年（1697）～ 天保：天保 6 年（1835）～

→正保・元禄期の事業では、国絵図を集めて日本図も作られている

b. 災害観と国土観

災害図…科学的知識・実証主義と人智を超えた「神」

c. 刊行図

都市図・国図・寺社境内図・道中図など。

※すべての都市・国で刊行されたわけではない。

○「水の都」と古地図

・松江／出雲国を描いた地図の例

国絵図

松江城下図

郡絵図

村絵図

・「登米寄港図」

基本情報：個人蔵、軸装（卷子状）、法量 36cm×1736cm

内容：大坂－松江の航路 構図：海（下）と陸（上）→「海」の視点

類似の作品：

- ・「海瀕舟行図」 寛文 7（1667）年（神戸市立図書館ほか）
→公儀による巡視がもとに
- ・「大坂-松江航路図」 年不詳（神戸市立博物館）
→「登米寄港図」と同じ系譜

・「登米寄港図」の読解

景観年代

〔①斐伊川河口部の表現、②天神川の表現、③大和川の表現〕⇒1689～1704 頃

※景観年代と作製年代は別

地形表現

大坂－松江を描くと……「西向き→東向き→西向き」＝方向が変化

→どう表現？

a：紙を継ぐ b：折しろ c：地形を直線に

出雲・石見の重視

17m 超の全長のうち、11m 程度が出雲・石見の海岸線が占める！

＝出雲・石見についての詳細な知識と、瀬戸内海の概略的な知識の融合

⇒複数の地図を組み合わせず？

「登米」との関係

航路の表現：大坂→松江 登米：松江→大坂

⇒松江は起点？

⇒「登米」航路で実際に利用されたのか？

○古地図の役割

郷土の昔の姿／昔の政治や社会／昔の人たちの「イメージ」

⇒文字資料や民俗資料と補完関係にある地図資料